

J T B グループ労働組合連合会
第 2 回震災復興ボランティア 活動報告

J T B 首都圏地域労組
下山 隆史

3月11日の東日本大震災発生から半年以上経ちました。私の周囲にもボランティア体験者が増えてきて、彼らから現地の様子を聞くにつれて、被災地の現状を自分の目で見てみたい、そして、同じ日本人の仲間として自分には何ができるのか？そうした気持ちが高まってきました。

今回は J T B グループの代表として少しでも地域の皆さんに対して貢献できるのではないか、また、自身が体験したことを通じ、さらに支援の輪を広げていこうと思い、参加させていただきました。

《10月1日（土）参加者33名》

天候に恵まれ爽やかな秋晴れ、気温は11～13度くらいでした。関東よりも多少肌寒く感じました。宿泊している一ノ関のホテル8:00出発し、バスにて一路、陸前高田市へ。第一回の震災復興ボランティアでの出来事や注意事項など聞きながら現地の様子を各自が想像していたようです。

ホテルを出発して約1時間半で陸前高田市災害ボランティアセンター到着。土曜日の朝ということもあり各地からのバスで込み合っており、近くの「川の駅」にて待機するほどでした。ボランティアセンターでは係員からボランティアに関する注意点などオリエンテーションを行い、当日の作業内容の指示、作業に必要な道具（シャベル・バール・一輪車など）の積み込みを行いました。作業内容はあくまでも当日決定することです。ボランティアセンターにも一定程度の貸し出しはありますが、服装や装備はあらゆる作業を想定する必要があると感じました。

ボランティアセンター出発し、陸前高田市の市街地へ向かうこと約5分、周囲の様子が突然変わりました。ニュースや新聞で見てきた被災地の様子、それまで他愛のないおしゃべりをしてきた参加者も急に口数が減りました。そしていよいよ市街地に入ると、海岸線まで建物がほとんどない風景。改めて津波の破壊力の強さを目の当たりにしました。

海岸線に程近い場所が当日の作業箇所に着し、依頼主から周囲の状況など一通り様子の説明をいただきました。非常に印象的だったのは、依頼主の言葉で被害が大きすぎる場所にはボランティアのニーズが無いことだ、ということです。被害が少ない場所のほうがニーズがあるところにギャップがあるとおっしゃっていました。

作業としては側溝の土砂の除去、敷地内の瓦礫の集積、土地を平にならず、この3つでした。側溝の土砂が溜っていると雨が降った際にすぐに溢れてしまい、なかなか水が引か

ない。瓦礫に関してはまとめておかないと回収してくれない、土地を平にしないと作業する車が入ってこれない、などそれぞれの作業の意味を教えてくださいました。

シャベルで湿った土砂を側溝から出し、一輪車に乗せ廃棄場所へ運ぶ。除去したら別の敷地から流入しないように工夫をして終わるという作業。

土地を平にならず作業では敷地内にできていた瓦礫と土のならし作業です。男性女性問わずシャベルを駆使し、一輪車に乗せ、瓦礫は鉄と鉄以外に分別し廃棄。ひたすらその繰り返しでした。作業が進むにつれ参加者の息が合い、役割分担が明確になり、作業効率が上がり参加者みんなが一体感を実感していました。

昼食休憩のときに、先月までグループ労連書記局にいらっしゃった書記さんが、暖かい汁物や大福など差し入れしていただき、午前中の作業で早くも疲労感をにじませる参加者を大いに励ましていただきました。

瓦礫の集積については敷地に散乱している瓦礫を上記同様に鉄と鉄以外に分別する作業です。瞬く間にいたる場所に瓦礫の山が出来上がりました。また、その周囲の住民の遺留品がないかを確認作業していたところ、その近隣の表札やクレジットカード・診察券・食器などが発見され、そこに間違いなく人々の暮らしがあったことを物語っていました。

作業終了後、依頼主のご厚意で、通常一般の人は立ち入り禁止の陸前高田市役所・市民ホール・市民体育館を案内いただきました。（依頼主の方がついていれば入れる区域だそうでした。）そこは3月11日から捜索作業を除いては全く手つかずの場所とのこと。それぞれの場所での生存者の有無など、参加者全員が息をのんで聞きいっていました。今回の悲劇はこうした公共施設が避難場所に指定されていて、5mを超える大津波に襲われてしまったことだそうです。今回私たちが作業した場所、見学した場所は5mを超える大津波だったそうです。見学した3個所の建物は鉄筋コンクリートだったためかろうじて形は残していたが、壁面が崩れていたり、市民体育館の時計は津波が襲ってきたであろう15:30で止まっていて、その時の様子を想像すると、ただひたすら胸が痛みました。

《10月2日（日）参加者35名》

初日同様爽やかな秋晴れ、ただし起きた時に窓ガラスに水滴が……。気温が低かったのだろう。再び陸前高田市に向かい、当日の作業は斜面の除草と瓦礫撤去となりました。斜面といっても海岸から200mほどしか離れていないため、小型の船が津波で押し流されてきていました。なれない斜面での作業に参加者はとまどいつつも、カマ・熊手・一輪車などを巧みに操り徐々に人が歩ける斜面に仕上げていきました。ここでも付近の住人のものと思われる財布やカード類などが発見され、そこからこぼれ落ちてきたプリクラは持主の生活を彷彿とさせるものであり、持主のもとに戻ることを願うばかりです。

この日依頼された敷地があまりにもひろかったため、翌日以降に引き継ぎとなってしま

いましたが、到着した時よりもはるかに整然となった作業エリアに参加者一同胸を張って、現場をあとにしました。

備品の返却にボランティアセンターに再び立ち寄りましたが、ボランティアスタッフの明るい対応、私たちが乗っているバスに対して、到着するとき・出発するとき見えなくなるまで笑顔で手を振っていた姿が印象的でした。

《最後に・・・》

作業現場で印象的だったことは、そこに生活音がないということでした。作業をしていないと私たちの声を除いて風の音以外、全く音がなかったことです。人の生活音がないと非常にさびしく、活気がありません。一日も早く陸前高田に生活の音が戻ることを祈ってやみません。

また、一ノ関から陸前高田市に向かう行きの道中、沿線に「遠方より災害復興支援のため陸前高田に来ていただき感謝申し上げます」「全国の皆さんご支援ありがとうございます」だとか、陸前高田から一ノ関に向かう帰りの沿線「ありがとうございました、私たちは負けません」このような看板が目立ちました。これを見てどれだけ現地の方々は全国からの支援に対しての感謝と、それに対して自分たちも頑張る！といった思いの表れだと感じました。その思いを少しでもサポートするため、こうしたボランティア活動のなす意義は大きいと感じました。

携わる人数が多くなれば、大きな力になる。まさにボランティア活動はその通りだと思います。今後は私が体験したこと、見てきたこと、感じたこと、想いを伝え、一人でも多く支援の輪を広げてゆきたいと考えています。また、ボランティア活動を通し、グループの仲間と一体感や連帯感を共有できたことも非常に貴重な体験でした。参加者全員がこれを機に社会貢献活動に関する更なる理解と労組活動への参画をしてほしいと思います。

